がっているという、この事実を考えると、その不可思議ななぞは釈然として氷解するのです。

皆様、ソツと胸に手をおいてみましょう。生きていますね。心臓は鼓動し肺は息づいています。それは、あなたの肉体のいのちです。けれど残念なことに、いつかはその心臓の鼓動もやみ、肺の呼吸は止まり、目も見えず、耳も聞こえなくなりましょう。肉体のいのちは、やがて終わるのです。

けれど、更に心の耳をすませて、あなたの一番奥底の声に耳傾けて見てください。時間と空間とを超越し、無限なるものに向かってあえぎ続ける、あなたの魂の息吹きにお気づきにはなりませんか？

深淵のような、限りのない価値をもつ、あなたの魂の實在にジツと目をとめて、ああ、生きて来てよかったと、お思いにはなりませんか？

科学万能の現代です。けれど、それに眩惑されて私たちのほんとうの姿を見失ってはいけな

と思うのです。
では、また来週、皆様ごきげんよう。

第十五話 思い出話

皆様、ここしばらく少し理屈っぽいお話が続きましたので、きょうは中休みの意味で、ちょっとした思い出話を申し上げてみたいと思います。どうぞ、楽な気持ちで聞いてくださいませ。

そうですね。もう二十年近くも昔のことになりました。どうぞ、楽な気持ちで聞いてくださいませ。戸の教会に勤めることになりました。実は、私は神戸の生まれなので私にとってはすべてがなつかしいこきょうなものでした。神戸に赴任して間もなく、私は教会の伝道婦から、Kという家のお嬢さんが、もう何カ月も胸をわずらって寝ているのですが、私が神戸に来たことを知って、とても会いたがっているという話を聞きました。Kの家の長男というのが、私と小学校の同級生で四十年前のカトリック信者といえば、同じ小学校の生徒の中では、ほんとうに数えるばかりしかありませんでしたので、Kは私にとっては信仰を同じうする貴重な友人でありましたが、この友人も胸を病んで、ある夏、須磨の海岸で若い生命を終わらせたのでした。今、同じ病気に伏せている少女というのは、その妹なのです。Kの妹ともなれば、何をおいても見舞ってやりたい信者の

ひとりだったのです。

少女、千代子というその少女は、私の記憶に残る幼な顔をかすかにとどめながら、すでに十八才の美しい娘に育っていましたが、数カ月前から病みついた病身を、床に横たえたままで私を迎えてくれました。

「ご免なさい、神父様。ほんとうに久し振りにお会いする神父様を、こんなかっこうでお迎えして……。」

千代子は、はにかみながら、そう言って、それでも十数年振りに会う喜びを包みきれないように、浮き浮きとした調子で、その後のことなど語って聞かせてくれた後で、

「ほんとうにご免なさいね。でも冬の間は寝ていなきゃいけないのですって。けれど来年の春が来たらお床上げをしますの。全快祝いには神父様をお呼びして、私の手料理をうんとごちそうしますわ。」

と、つけ加えたのでした。それは、その年も暮近い十一月の半ばのことでした。最初の訪問を終え、その家を出ようとして私は玄関の上りがまちで、その母親K夫人を捕え、なにげなく、

「病気の方は大したことがなさそうですね。」
と申しました。ところが、夫人はちょっとあたりをはばかりに声を落として、

「それがねえ、神父様、そうじゃないんです。あれの兄が同じ病気だったのですから、私たちも少し注意をすればよかったですけど、とても丈夫で運動の選手なんかしていたものですから、つい油断したのが悪かったのですよ。か、医者にも手おくれだと言わんでは。来年度の春までは持つまいって。……ただ、あの子だけが、それを知らないのです。」

ああ！ そうだったのか、と私は、今しがた耳にした少女の声「来年の春にはお床上げをしますの……。」とささやいた、少しはずんだ少女の声を悲しく自分自身で繰り返しながら、帰路に着きました。

千代子の病状は、しろうと目には大した変化は見えませんでした。そして、毎週の訪問に「早く春が来ればよろしいのにねえ。」と、きまっただように繰り返す千代子の言葉を聞きながら、やがてその年も暮れて行きました。千代子はひとり静かに枕にはおを寄せて、正月のさわめきを聞いておりましたが、そのころから病状の悪化が少しずつ目に見えて来たようです。

ある日、私が訪問を終えて暇を告げようとしますと、母親が私をソッと物かげに呼んで申しました。

「神父様、お医者さんの言葉では、もう三カ月は持つまいとのこと。ところで神父様におりいってお願いがあるのですが……神父様もご存じのように私の夫は熱心なカトリック信者で、ほ

んとうにその信仰にふさわしいりっぱな臨終を遂げてくれましたし、私の長男も母親の私の口から言うのもへんですが、私自身頭の下がるような美しい死に方をしてくれました。ところで、あの娘も生まれながらの信者なので、信仰に生きるものとしてこの世に未練を持たず、あの醜い死に方をしてほしくありません。どうぞ神父様、お願いですから、あの娘によい臨終の心構えを教えてやってくださいまし。神父様なら、きっとおできになりますわね。」

美しい臨終……：靈魂の不滅を信じ、永遠の生命への希望に満たされて、明かるくこの世を去る……：そう、それがカトリック信者の特徴だと言っているのです。そして、信者の靈魂の司牧に当たるカトリック神父の重要な仕事の一つは、自分がそのような美しい臨終を遂げることができると同時に、同信の信者たちにも同じように、りっぱな最期を遂げさせることにあると言っているでしょう。私はカトリック神父としての自分に課せられたこの苦しい仕事を、引き受けることを夫人に約束して、その家を出ました。

美しい臨終……：道を歩きながら、私はそうつぶやいて、そのときフト思うともなしに、それより六、七年以前に死亡した、私の姉の臨終のありさまを思い浮かべました。というのは、京大医学部を出て神戸で小児科医を開業していた、ある医師に嫁いだ私の姉のことなのですが、姉は、カトリック信者として最期まで強い信仰に生きましたけれど、医学者としてのましがった誇りか

ら、宗教に対しては故意な無関心をよそおっている夫の態度に、生涯心を痛めていたようでした。その姉が半年ばかり病みついに揚げ句に、腸狭搾という病気の併発を見て、危篤状態に陥りました。長いわずらいに衰弱し切っている身体には開腹手術は、思いも及ばぬことでしたが、それでも最後の手段を見い出そうとして、当時、関西では名の聞こえた名医たちが集まって、立ちあい診断をし真剣に協議しましたが、そこで得られた結論は「絶望」という一語だったので、医師たちの協議を終えて義兄が、姉の枕元に引き返して来たとき、姉はこう申しました。「あなた、私の病気は直るのでしょうか。それとも、もう望みがないのでしょうか。心の準備がいりますので、ほんとうのことを教えてくださいまし。」

その問いに義兄は、はっきり答えました。「卒直に言うが、お前のからだには施す手がないのだ。だから、もう助からぬものと思っておくれ。」

ところが、そばでこの短い会話を耳にした義兄の両親たちが、アッとばかり目の色を変えて騒ぎ始めました。

「まあお前、なんということを言うのだ。病人に向かってそんな残酷な……」
けれど、義兄は泣き騒ぐ両親を尻目に毅然として、こう宣言したのでした。

「お父さんたち、心配しないでください。私の妻はカトリック信者なのです。あなた方にはわからないんです。」

私たちは、ハッと胸をつかれた思いで義兄の顔を見ました。そのときの義兄の面にはそこに居合わせたすべての人々を沈黙させる、なにか冒したいものが輝いているようでした。その翌日、病状は急変して臨終が迫って来ました。苦しい息の下から、姉は、かすんだ目をあけて「マリア様のお顔が見たい。」と叫びました。義兄はサッと立って、隣りのへやからラファエルの聖母の額を持って来ました。姉の目の見える所に置こうとして、一瞬とまどった後で、そこら辺にあった釘のような物を手にとると、姉の病床の足もとに巡らしてあった、金無垢のびょうぶにグサとそれを打ち込み、それに額をつりました。ひとりの人間の臨終の場ではありましたが、義兄の父親がそれを見て、どうでもがまんがならぬというように、小声で義兄に向かい「なにもお前、金びょうぶを破らなくとも……」と小言を言いかけた瞬間、義兄の鋭い言葉が一座の人の心を打ちました。

「金びょうぶがなんだと言うんです。こんなものはいつかなくなってしまふんだ。だが、この世には永遠になくならないものがある！」

臨終の苦しみをあえいでいた姉に、この言葉が聞こえたのでしょうか、「アア」と、心からの安堵のため息にも似た大きな息をはくと、夫にニコリ笑いかけ、笑いかけたままでフツと、こ

と切れたのでした。ついでですが、義兄は姉の死後、未だ幼なかつたふたりの忘れ形見を両手に毎日曜日、欠かさず教会に通う熱心なカトリック信者になりました。その義兄も、今はすでに故人ですが……。

話が脇道へはずれましたが、私は義兄が「私の妻はカトリック信者です。」と大見得を切ったあの言葉と、今しがた耳にしたK夫人の言葉とが、まるで符ちょうを合わせるようにピッタリと一致して、一つの真実を大きく叫んでいるのを感じながら帰路に着いたのでした。

だが、それからの私は実ははみじめでした。よき臨終の準備をさせる……言葉は簡単ですが、すべてを神の御手にゆだね去った平安な気持ちにさせるということ、あくまでも病気に打ち勝とうという闘病心を起こさせねばという、おもんばかりとが入り乱れて、事はそう簡単ではありません。そうこうするうちに、一月も過ぎ、二月もはや半ばを過ぎようとしていました。ある朝、家人に言葉をかけて病室に入ろうとする私を「ちょっと……」と呼びとめた夫人は、声をひそめて「神父様、この前お願いしたこと、どうぞ急いでくださいませね。足が……」

と自分の両手で大きな輪をつくりながら

「……こんなに、むくんで来ました。お医者さんは、もう十日位と言っていますので……」

と言うのです。私は改めて事態の切迫したことを知らされ、少しゆううつな気持ちで病床の枕元にすわりました。

「ねえ、千代ちゃん。きょうはちょっとお話ししたいことがある。あのね、ナザレトのおとめマリアに天使が現われて、救い主の母になりますか？」と言われたとき、マリア様がなんと答えたか知っているでしょう。そう、『私は神様の婢女ですから、なんなりと神様のお望みのままに！』と言いましたね。この第一の『お望みのままに』という言葉で、神の御子がおとめマリアの胎内に宿るといふ大きな神秘ができたのでしたね。それから三十三年経って、今度はイエズ様があすは捕われて十字架に磔はりつけになるといふ前の夜、ゲッセマニの園で血の汗を流してもだえながら、三度まで繰り返された言葉を知ってるでしょう。『天の父よ！この苦しみを私から遠ざけてください。けれど、どうでもそうしてくださいとは申しません。すべてはお望みのままになりますように』この第二の『お望みのままに』という言葉で、神の御子が十字架にかかって人類の罪を償つぐなわれたといふ大きな神秘ができたのでしたね。ところで、私たちのひとりひとりがほんとうに、これらの神秘によって靈魂の救いを受けるためには、第三の『お望みのままに』という言葉が言われなければならないのですが、今度はいろいろいいたれがそれを言う番なのでしょうね？」

私の話の間中、大きな目をあけてまたたきもせず、まじまじと私の顔を見つめていた千代子は突然、私の言葉をささざりました。

「わかりました。神父様、今度は私が言う番なのですわ。」

そして千代子は目を閉じると静かに、しかし深い調子をこめて、口ずさみました。

「神様、私はあなたの婢女はひよめ、どうぞお望みのままになさいませ。」

そして、目をあけるとこり私に向けてほおえみかけ、

「神父様、これでいいでしょう。」

と言ったのです。

それからの十日間、千代子は朗らかに生きました。ともすれば暗くなるうとする家族の気持ちを引き立てようと、ちゃめっばい、いたずらを考へては家中に笑いをまき起こすのは、死んで行くこうとする十九才のおとめ自身であったのです。千代子は迫り来る死を見つめ、死を抱き締め、希望と喜びとを形見にこの世を去りました。臨終の苦しい息の下から、枕辺に寄りそう人々に残した最後の言葉を私は終生忘れないでしょう。

「ねえ、泣かないで、私、お待ちしていますわ。」

これが千代子の遺言でした。

では、皆様、さようなら。

第十六話 魂のいのち

皆様、秋もようやく深く深まって来たようです。秋は思索の秋と言われます。生きることのわずらわしさに心奪われて、ともするとあまりにも物思うことの少ない一日一日が過ぎて行きます。でも秋はものを思わせるのです。ふけ行く秋の夜、静かに、過ぎた年月を、そしてまた私たちの行末を考え、生きている私の生命いのちがこれだよいかと反省するのも、秋の聖い仕事の一つでありましょう。

さて、先週は中休みの意味でちょっとした思い出話をいたしましたでしたが、これからまたしばらく、私たちの幸福探求の思索の旅を続けることにいたします。

私たちは、私たち人間というものの持つ複雑さを掘り下げて、人間の本質を理性的動物——すなわち動物的な生活の主体としての物質である肉体と、理性的活動の主人公としての魂、あるいは靈魂といわれるものとの結合——であると見ることによって、私たち自身の生命の第一のなぞを解いたのですが、今しばらくこのなぞの鍵を他のすべてのなぞにも当てはめてみましょう。